

サンティアゴ巡礼現地調査の日程とその概要

山 川 廣 司

は じ め に

近年「四国遍路を世界遺産へ」の取り組みが四国4県や民間を中心に行われているが、このような地域の文化遺産を世界遺産に登録するには質の高い学術的裏付けが必要であることは言うまでもない。そこで私たちの研究会では、今年度より「四国遍路を中心とした日本・世界の巡礼の総合的研究」を研究課題に愛媛大学研究開発支援経費（COE育成支援研究）の交付を受け、世界遺産をめぐる動向、遍路を含めた巡礼研究の研究成果などを学びつつ学術面から世界遺産に関する系統的・持続的な研究活動を展開することで、四国遍路の世界遺産登録に向けて地域の活動に役立てたいという構想を掲げて共同研究を立ち上げた。

その中で内田九州男研究代表の強い要望で、世界遺産に登録されているサンティアゴ巡礼の現地調査を実施することとした。巡礼のルート（道）や宿泊施設の整備状況を中心に、沿道におけるサポート体制、沿道の教会関連施設の役割、歩き巡礼者の実態などについて調査し、四国遍路の世界遺産化について学術的見地から提言を行うべく資料収集を図ることにした。

その日程は以下の通りである。

日次	月 日	都 市 名	時刻	交通機関	通 用
①	12月16日 (日) 曜日	松 山 空 港 発 関 西 空 港 着 関 西 空 港 発 ヘルシンキ ヘルシンキ マドリッド	7:55 8:40 12:00 15:15 17:00 20:25	NH 1748便 AY 78便 AY 891便	マドリッド（泊）
②	12月17日 (月) 曜日	現 地 調 査		ミニバン 借り上げ	マドリッド - サラゴサ - バンプローナ - プエンテ・ラ・レイナ ログローニョ - サント・ドミンゴ・デ・ラ・カルサーダ サントドミンゴ/パラドール（泊）
③	12月18日 (火) 曜日	現 地 調 査		ミニバン 借り上げ	サントドミンゴ - ブルゴス - レオン （大聖堂 インドロ教会） レオン（泊）
④	12月19日 (水) 曜日	現 地 調 査		ミニバン 借り上げ	レオン - アストルガ - ビアフランカ・デル・ビエルソ - セブレイロ峠 ポルトマリニ - アルスア - モンテ・ド・ゴッソー サンティアゴ・デ・コンポステーラ サンティアゴ・デ・コンポステーラ（泊）
⑤	12月20日 (木) 曜日	現 地 調 査		ミニバン 借り上げ	サンティアゴ・デコポステーラ⇄フェニステレ サンティアゴ・デ・コンポステーラ（泊）
⑥	12月21日 (金) 曜日	現 地 調 査			サンティアゴ・デ・コンポステーラ旧市街巡礼関係 サンティアゴ・デ・コンポステーラ（泊）
⑦	12月22日 (土) 曜日	サンティアゴ バルセロナ 現 地 調 査	8:05 9:35	IB5788便	バルセロナ宗教関係施設等調査 (サグラダ・ファミリア聖堂、カテドラル、王の広場、市歴史博物館) バルセロナ（泊）
⑧	12月23日 (日) 曜日	バルセロナ ヘルシンキ ヘルシンキ	10:00 14:55 17:20	AY 908便 AY 77便	機内（泊）
⑨	12月24日 (月) 曜日	関 西 空 港 着 関 西 空 港 発 松 山 空 港 着	9:45 14:30 15:20	NH 1747便	

まず主たる原案は、2005年に実際にサンティアゴ巡礼路を徒歩で踏破された鎌田一志さんの著書『スベ

ン『悠久の大地』や昨年2007年7月～11月に日本経済新聞に掲載された土田芳樹記者の『還暦カミーノ スペイン巡礼記』などを参考に山川が作成し、実際の日程書類作成を伊予鉄トラベルの篠原敬さんをお願いした。特にミニバンを借り上げての日程については現地のミカミトラベルの進藤さんと打ち合わせながら何度も修正を繰り返し、上記の日程表ができた。最大限我々のかなり無理な要望を聞き入れていただいた篠原敬さん、進藤さんにお礼を申し上げたい。

1. 出発に先立って—サンティアゴ概略史

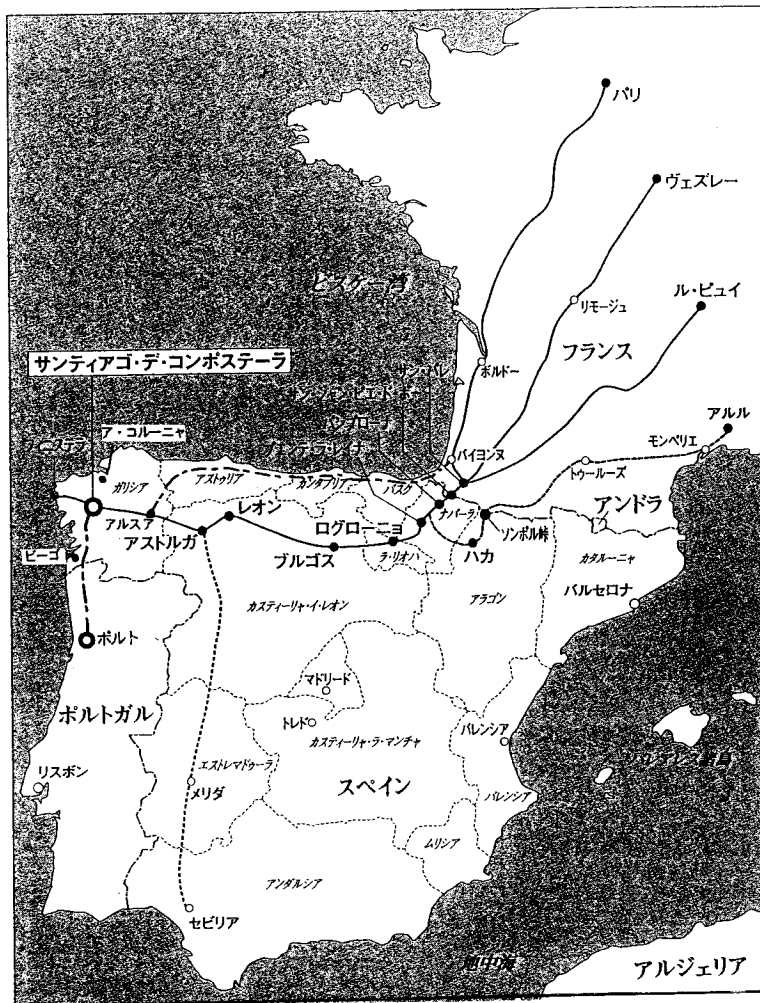
ヨーロッパ中世の三大巡礼地の1つであったサンティアゴ・デ・コンポステーラは、イエス・キリストの十二使徒の1人である大ヤコブの墓所があるとされる大聖堂を中心に築かれた都市であるが、その歴史は古く、新石器時代に遡る。ローマの支配を経て、711年にイスラームがイベリア半島のほとんどを征服したが、それに対抗してキリスト教徒側がレコンキスタ（国土回復運動）に着手する。その最中、9世紀にこの地の原野に光が降り注ぎ、指し示した場所から出た遺骸をローマ教会が聖ヤコブと認定したことから、この地がキリスト教の新しい聖地となり、そのことがキリスト教徒の士気を大いに鼓舞することとなった。さらにアストゥーリアス王アルフォンソ2世が聖人の教会建設を命じたことから人々が訪れるようになり、サンティアゴの道の形成が始まった。特にクリューニ修道会がイスラームへの対抗からサンティアゴ巡礼を奨励し、それに呼応して周辺の王族諸侯が巡礼者のための宿泊施設や救護院、橋、教会の整備を行い、また巡礼者を保護した。その結果12～14世紀にはサンティアゴ巡礼が非常に盛んとなり、年間50万人の巡礼者が訪れたが、中世の終焉とともに巡礼者は減少した。その理由については①1492年にイスラーム勢力がイベリア半島から一掃され、レコンキスタが終了したこと、②スペイン統一国家が誕生して大航海時代が招来したことにより、さらに西にインディアス（アメリカ大陸）が存在することになり、ヨーロッパの西の端に位置していたサンティアゴ・デ・コンポステーラへの人々の関心が薄れたこと③マルティン・ルターに始まる宗教改革は巡礼には否定的であったことなどが挙げられる。それ以降サンティアゴ巡礼はフランコ政権が崩壊（1975年）するまで停滞するが、その後の民主化運動、さらに1985年にサンティアゴ旧市街、1993年にサンティアゴへ至るスペイン側の巡礼道の全行程がユネスコの世界遺産に指定され、外部からの力によってではあるが再び巡礼が盛んとなった。現在のサンティアゴ・デ・コンポステーラは地方行政の中心都市、大学都市、観光都市として目覚ましい発展を遂げている。

2. カトリック巡礼路「サンティアゴの道」

「サンティアゴの道」とは、聖ヤコブの聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラを目指す道の総称で、大きく5つの道に分けられる。

- ①北の道（El Camino del Norte） フランス海岸側からカンタブリア地方に沿う北の道
- ②フランス人の道（El Camino Francés） フランス国内4カ所から出発し、プエンテ・ラ・レイナで一つになり、「北の道」の南側を並行している道
- ③ポルトガル人の道（El Camino Portugués） ポルトガルからの道
- ④南の道（El Camino del Sur）、銀の道（El Camino Vía de la Plata） スペイン南西部を通る道
- ⑤ イギリス人の道（El Camino inglés） イギリスやアイルランドから船を使った「海の道」など多様な道がある。このうち最もポピュラーなのが「フランス人の道」で、1993年にスペイン側が、1995年にフランス側がユネスコによって世界遺産に指定された。

巡礼路はパリからサンティアゴ・デ・コンポステーラまでが約2,000km、ピレネー山麓からサンティアゴ・デ・コンポステーラまでが約800km、フィニステレーまでが約900kmといわれている。徒歩で100km以上



サンティアゴ巡礼路
出典：安田知子、p. 6に加筆した。

（自転車でも200km以上）を歩いたことが証明できれば巡礼者と見なされる。そのため多くの巡礼者はセブレイロ峠とポルトマリンの間の町サリア Sarria から出発するそうである。また巡礼者は何処から歩き始めてもよいし、何処でやめてもよい。安田知子氏によれば、巡礼路では足の故障や体調不良、またお金を使い果たしたりして予想以上にリタイアする人が多いが、タフではあってもヨーロッパの人はこれ以上歩くことが無理だと思ったら、さっさと気持ちを切り替えて爽やかにリタイアしたり、バスに乗ったりするそうである。

今回の我々の調査は時間的な関係で、マドリッドを起点にサラゴサ経由でフランス人の道沿いにパンプローナからサンティアゴ・デ・コンポステーラまで、さらにフィニステレまでのルートほぼ1400kmを、ミニバンを借り上げて走破した。本来なら歩きながら巡礼を実体験すべきであるが、今回は諸事情によりやむを得なかった。また出かけた時期が巡礼シーズンではなく、巡礼者の姿もほとんど見かけなかったことは残念であった。

3. 巡礼路を辿る

今回我々が通った巡礼ルートを辿りながら、調査の概要と訪れた土地を紹介したい。

(1) サラゴサ Zaragoza

前述のように、巡礼路からは外れるが、最初に訪れた都市がマドリッドからの経由地であるサラゴサである。ここはスペイン東北部を流れるエブロ川中流に位置し、人口約65万（2006年）のスペイン第5位の都市で、アラゴン州の州都であり、サラゴサ県の県都でもある。古代ローマ時代に植民都市としてアウグストゥ

スにより「カエサラウグスタ」という名で建設され、2世紀に最盛期を迎える。ローマの公共浴場や劇場などの公共施設が建てられ、現在も城壁などが残っている。7世紀に西ゴート王国の中心地として繁栄した後、イスラームの支配下に入るが、12世紀にはアルフォンソ1世によって設立されたアラゴン王国の都となった。フィリッペ2世との抗争、ナポレオン軍の攻囲など苦難の時代があったが、ナポレオンの攻囲から200年目の本年2008年に「水と持続可能な開発」をテーマにしたサラゴサ万国博覧会（認定博）が開催される。



ピラール聖母教会正面



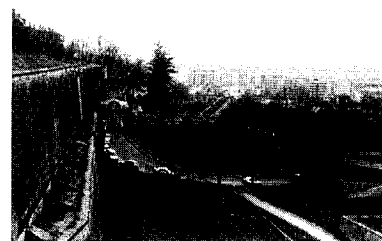
左から市庁舎、ラ・ロンハ、カテドラル



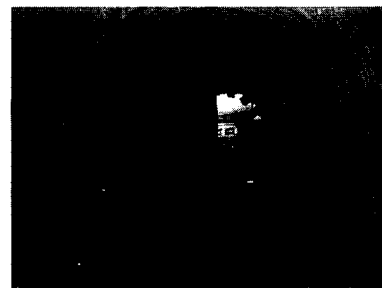
発掘中のローマ時代の城壁



パンプローナのカテドラル



街への入口「フランス門」



プエンテ・ラ・レイナのサンティアゴ教会の扉

ローマ時代に作られたピエドラ橋Puente de Piedraを渡ってピラール広場に入ると、広場に面して主要建造物は建っている。①ピラール聖母教会Basílica de Nuestra Señora del Pilarは、40年1月2日にエブロ川の岸辺にいた聖ヤコブの前に聖母マリアが柱の上に立って現れ、信仰の礎となる柱（ピラール、奇蹟の証）を渡したことに端を発し、初期キリスト教徒が礼拝堂を築いた場所に今日目にする教会が17世紀に建てられ、18世紀にはシンボルとなっている彩色タイルで飾れた丸屋根も加えられた。②アラゴン語で大聖堂（大司教座）を指すカテドラルLa Seoはアラゴン・ゴシックの傑作といわれているが、ロマネスク、ムデハル、チュリゲラ様式が混在する調和のとれた建造物である。③16世紀に商業都市として繁栄したサラゴサに建てられたラ・ロンハLa Lonja（商品取引所）は、レンガ作りのルネッサンス様式の瀟洒な建物である。④スーダの塔Torreón de la Zudaは、イスラーム王国時代の10世紀に建設されたスーダ宮殿の一部で、レコンキスタ後も唯一残された塔であるが、現在は1階がインフォメーションオフィスとして活用されている。丁度その近辺ではローマ時代の城壁の発掘が行なわれていた。

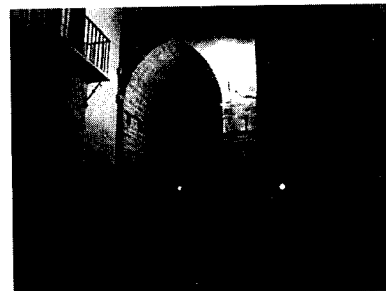
（2）パンプローナ Pamplona

パンプローナはアルガ川河畔の高台に広がるナバラ州の州都で、人口約19万人（2004年）の都市である。パンプローナの名はローマの将軍ポンペイウスが「ポンペーロポリス（ポンペウスの町）」と名付けたことに由来する。10世紀から16世紀初頭まで続いたナバーラ王国の都として栄えた。町の入口には、マグダレ橋があり、城壁が高く迫ってくる。巡礼者はフランス門を抜けて石畳道で城内の旧市街へと導かれる。狭い通りを大聖堂Catedralへと歩く。我々がパンプローナに到着した頃はすでに夕暮れが迫り、闘牛場近くで車を降り、巡礼者とは逆方向に狭い旧市街の石畳の道を大聖堂に向かった。カテドラルは元々ロマネスク様式で建てられたが、現存するほとんどの部分は14～15世紀に改築されたゴシック様式で、ファサードは18世紀末のバロックと新古典様式の建造物である。残念ながら入口はすでに閉まっており、外観を眺めた後、路地を通して高台に出た。そこからは眼下に修復工事中の城壁や曲がりくねった巡礼路と街への入口で

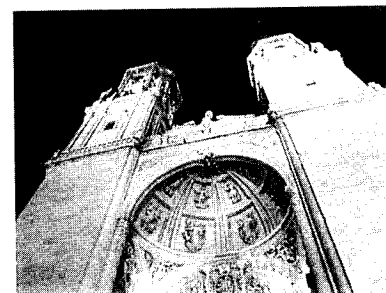
あった「フランス門」が確認できた。

(3) プエンテ・ラ・レイナ Puente la Reina

ここはフランス人の道とソンボルト峠を越えてきたトゥルーズ道との合流地点で、ここで巡礼路は1つになる。とっぴり日が暮れた頃に到着し、まずはマヨール通りのサンティアゴ教会に急ぐ。狭い巡礼路沿いに建つ教会のファサードの彫刻は見事であるが暗くてよく見えず、写真を撮ってアルガ川にかかる橋（プエンテ）に向かう。これは町の名「王妃の橋」の由来となっているロマネスク様式の橋で、11世紀にこの地の領主の妃によって建造された。サンティアゴ巡礼路の中で最も有名な橋の1つであるが、暗闇の中で全容は見え、写真で見るとような優美さは残念ながら確認できなかった。



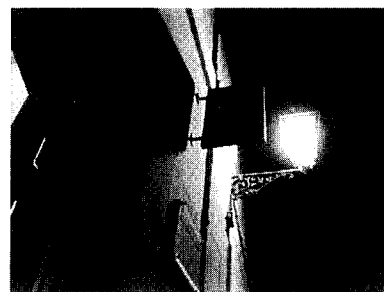
夜の明かりに照らされる「王妃の橋」



ログローニョのカテドラル

(4) ログローニョ Logroño

本日最後の訪問地であるリオハ地方の中心都市ログローニョでは、クリスマスのイルミネーションに飾られた旧市街の中心地エスポロン公園で車を降り、カテドラルに直行した。正式名サンタ・マリア・デ・ラ・レドンダ大聖堂 Concatedral Santa María de la Redonda はメルカード広場に面して立つバロック様式の教会で、15世紀に建てられ、18世紀の増改築で現在の形になった。サンティアゴ巡礼の巡礼者のほとんどが訪れる重要なカテドラルである。午後8時過ぎになったが、運転手のフランシスコ・ザビエル・トソさんも一緒に、^{まちなか}町中のアルベルゲ（巡礼宿）を探してほとんど人通りのない路地を右往左往してホタテ貝の印の看板がある入口を見つけた。しかし時間も遅かったので外観の写真を撮って引き上げた。



ログローニョのアルベルゲ

(5) サント・ドミンゴ・デ・ラ・カルサーダ

Santo Domingo de la Calzada

長かった1日の日程を終え、サント・ドミンゴ・デ・ラ・カルサーダのパラドル（国営ホテル）に到着したのは午後9時近かった。ここは11世紀に聖ドミンゴが巡礼者のための施療院兼宿泊施設として作ったもので、外観は目立たないが、内部の調度品などは歴史を感じさせる逸品で飾られ、格式の高さを感じさせる。

町の名サント・ドミンゴ・デ・ラ・カルサーダは「石畳の道（カルサーダ）の聖ドミンゴ」の意味である。聖ドミンゴは、巡礼者のために巡礼道を整備し、橋を架け、宿や救護所を建てた聖人で、生涯を巡礼者のために奉仕した。12世紀に彼の墓の周りに村ができて大聖堂が建てられ、その傍には18世紀につけ加えられたバロック様式の「ラ・リオハの少女」といわれる優雅な鐘楼がある。大聖堂の内部は博物館として公開されており、聖ドミンゴの棺や聖遺物や聖具、生きた鶏などを観ることができる。

聖ドミンゴと鶏にまつわる話がある。「14世紀にフランス人夫婦が息子を



サント・ドミンゴ・デ・ラ・カルサーダの大聖堂

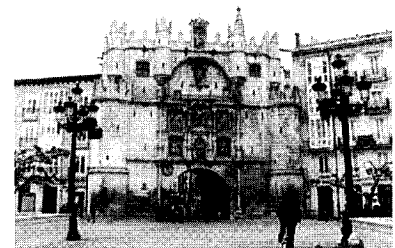


鐘楼「ラ・リオハの少女」

伴ってサンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼に出かけた。宿の管理人の娘は若い息子に惚れてしまい、誘惑をしたのだが拒絶されたため、彼の袋に銀のタブレットを隠し、翌朝彼を泥棒として訴えた。若者は捉えられて、絞首刑となった。悲しみにくれた夫婦が出発しようとする
と聖ドミンゴ様が足元から支えて下さったお陰で、私はまだ生きています、大丈夫ですと訴える息子の声を聞いた。そこで彼らは料理した鶏を食べようとしていた裁判官の許に行ってそのことを伝えたが、まるで相手にされず、あの丸焼きの鶏が鳴き出したりでもしたら、息子が生きていると信じようと言った。その時、鶏は皿から飛び出しそして翼を上げ飛び回り鳴き始め、少年の無実が証明された」というのである。この奇蹟を祝するため、鶏小屋が大聖堂の南側翼廊の壁に嵌め込まれている。鶏は数週間毎に入れ替えられ、その交替用の鶏がアルベルゲの裏庭で飼われているそうである。鶏が連続的に入れられるようになったのは1965年からで、鶏の鳴き声を聞くことができれば「幸運」を意味するとのこと、しかし私達は堂内で鶏の鳴き声を聞いたか記憶が定かでない。



サント・ドミンゴ・デ・ラ・カルサーダのパラドール正面



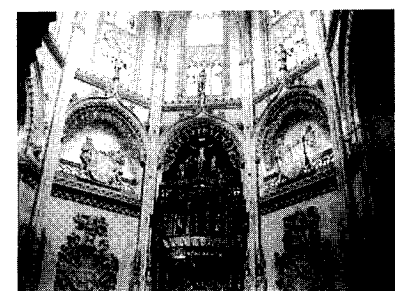
ブルゴスのサンタ・マリア門



ブルゴス大聖堂



大聖堂内部の八角形尖塔部分



コンデスタブレ礼拝堂

(6) ブルゴス Burgos

ケルト人の集落があったアルランソン川のほとりに9世紀末、中世ラテン語のburgus（城塞都市）に由来するアストリア王国の城塞都市としてスタートしたブルゴスは、レコンキスタ初期の重要な軍事拠点であり、11世紀にはカスティリア王国の都となった。また巡礼によって発展した典型的な町で、15世紀には32の救護院があったという。城壁で囲まれた町には12の城門があったが、その1つサンタ・マリア門Arco de Santa Maríaは16世紀に凱旋門に改築されたもので、頂きにはマリア像と天使、壁面には、ブルゴスを創建したディエゴ・ロドリゲス、カルロス5世、レコンキスタの英雄エル・シドラその歴史に所縁のある6体の彫刻が施されている。

この門を潜ると、サン・フェルナンド王広場を挟んでスペインの3大聖堂の1つで、シンボルの透かし彫りの尖塔を載せた2つの塔をもつ壮麗で優雅なサンタ・マリア大聖堂Catedral de Santa Maríaの偉容が迫ってくる。1221年に着工され、ゴシックやバロック、ネオクラシック様式などの影響を受けて16世紀に完成した大聖堂は、1984年にユネスコの世界遺産に登録された。その内部は中央祭壇をはじめ18の礼拝堂を擁し、54mの高さの八角形の尖塔や星形の丸天井、側壁のステンドグラスから差し込む光と細工が見事なコンデスタブレ礼拝堂など、時間がいくらあっても足りないくらい見応えがあり、午後2時の閉館ぎりぎりまで観てまわった。

その後、サンティアゴ巡礼路沿いにアルフォンソ8世によって巡礼者のために創設された国王の施療院Hospital del Reyを訪れた。現在はブルゴス大学法学部の校舎として使用されているが、内田先生はオフィスに行って交渉され、手帳にアルベゲのスタンプを押してもらった。大学の事務がスタンプを押すということは、恐らく巡礼施設の名残なのであろう。

(7) レオン León

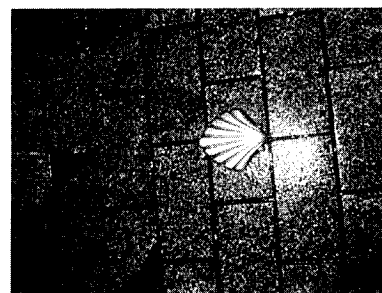
トリオ川とベルネズガ川に挟まれた平野に位置する海拔822mの街レオンの歴史は古く、その名前はラテン語のレギオ (legio 軍団) に由来するといわれている。軍団の周囲に人々が集まり、徐々に城壁を持つ街が形成された。その後、西ゴートの支配に組み込まれ、さらにはイスラームの侵攻を受け占領されるが、722年にコバドンガの戦いでイスラーム軍を破り、以後アストゥリアス地方がレコンキスタの拠点になる。アストゥリアス王国は徐々に領土を拡大し、10世紀にはレオン・アストゥリア王国が誕生し、1063年にサン・イシドロの聖骸がセビーリャから運ばれ、それを記念して新しい教会 (バジリカ) が建てられた。その後、配下のカスティーリャ伯が独立して王国を建て、レオン・カスティーリャ王国となった。レオンはその首都となり13～14世紀にはカスティーリャの流通の拠点として繁栄したが、1384年に猛威を振るったペストにより都市の人口は大激減し、19世紀初頭まで大きな発展は見られない。19世紀になって再び活気を帯びはじめ、20世紀にはスペインの最重要都市の1つにまで発展した。



ブルゴス・王の施療院

サント・ドミンゴ広場から大聖堂に向かう舗道に金属製の帆立貝が埋め込まれている。サンティアゴ・デ・コンポステーラへの方向を指し示す道標で、ここがサンティアゴへの巡礼路であることを改めて認識させてくれる。

壮大なゴシック様式のレオン大聖堂は13世紀半ば、アルフォンソ9世の命で建造され、数百年にわたりサンティアゴへの巡礼者を導いてきた。内部に入るとゴシック式ステンドグラスの数と見事さに圧倒される。100を越えるステンドグラスは上中下の3段で構成され、下段は植物、小動物を、中段は富裕な人々を、上段は新・旧約聖書の物語や聖人伝を描いている。その他、ルネサンス様式の聖歌隊席、15世紀に作られた主祭壇、レオン初代国王オルドーニュ2世の墓などがある。

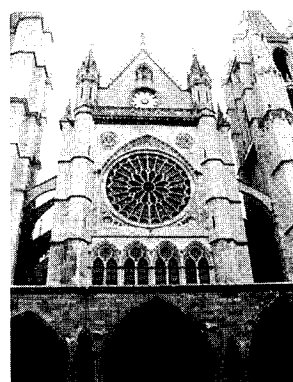


レオン・道路に埋め込まれたホタテ貝の道標

舗装された細い通りを抜けて視界が開けると、広場の向こうに中世レオンが偲ばれるサン・イシドロ教会のバジリカが見える。ここは旧市街の北に位置し、ローマ時代の城壁に隣接しているが、12世紀にセビーリャ大司教であった聖イシドロの遺骸が運ばれたことを記念して建てられた。着工以来18世紀まで増改築が繰り返され、ロマネスク、ゴシック、ルネサンス様式などが混在し、様式の統一感はないが、正面のファサードには「アブラハムによるイサクの犠牲」や「イスラームを撃退するサン・イシドロの騎馬像」が彫られている。内部はロマネスク・ゴシック様式が混在し、見事なフレスコ画が描かれており、祭壇中央の銀製聖遺物箱にはサン・イシドロの遺骸が納められている。また付属美術館では、王家の霊廟 (パンテオン) をみることができる。ロマネスク美術の傑作として新約聖書の諸主題や農民生活の情景など多彩なテーマを採り上げたフレスコ画で覆われている。



レオン大聖堂



レオン大聖堂正面

レオンでも、巡礼パスポートを入手する最後のチャンスということで巡礼インフォメーションセンターやサン・マルコス修道院近くのアルベ

ルゲなどを駆け巡ったが、結局たらい回しされただけで、巡礼パスポートは入手できず徒労に終わった。

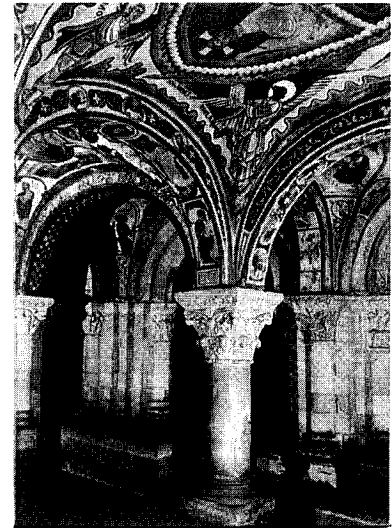
(8) アストルガ Astorga

レオンから西に約50km、セビーリャからの「銀の道」との合流点にあるアストルガは、ローマ時代からすでに幹線道路の交差点として重要な位置にあり、現在でも城壁をはじめローマ時代の遺跡からその繁栄を知ることができる。町は中世においても定期市が開かれ、また巡礼者の来訪によって賑わった。

町の規模は小さいが、15世紀に建てられたピンク色の壮大なゴシック様式のサンタ・マリア大聖堂が聳える。そそり立つ鐘楼と荘厳なファサードにはキリストの生涯の物語が彫られている。丁度ミサが始まり、内部の写真は撮れなかったが、丸天井を支える円柱が天に向かっての空間的広がりを出し、上昇感を与えている。それに隣接してアントニー・ガウディが設計した司教館 Palacio Episcopal が建つ。元々は友人のアストルガ司教の依頼によって設計したがその司教が途中で亡くなり、その斬新なデザインから教会側と意見が衝突し、彼は未完のまま手を引き、他の建築家によって完成されたものの司教は住むことはなかったそうである。現在は巡礼博物館となっているが、11時開館で時間が早すぎたため入館することはできなかった。



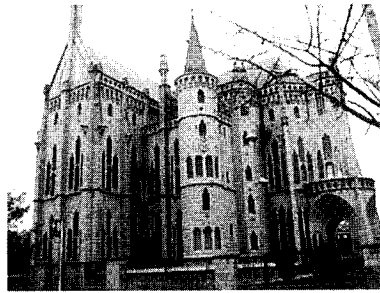
夕闇のイシドロ教会正面



イシドロ教会内部のフレスコ画
出典：Antonio Vinayo Gonzalez, p.5



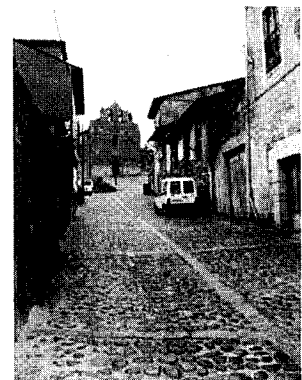
アストルガ大聖堂



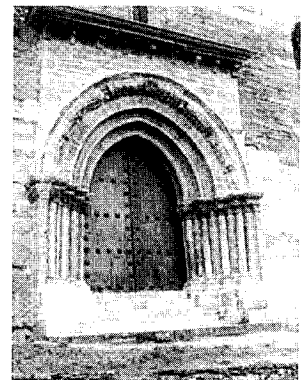
アストルガの司教館（巡礼博物館）

(9) ビリャ・フランカ・デル・ビエルソ Villa Franca del Bierzo

ブルビア川とバルカルセル川の合流地点にあるこの町は、「フランカ」という名前からも分かるように11世紀にアルフォンソ6世がフランス人たちを入植させて造った町で、レコンキスタが他所からの再植民でもあった側面を示す格好の例である。まずは細い坂道の先のサンティアゴ教会 Iglesia de Santiagoを訪れる。手前に山小屋風のアルベルゲ「アベフェニックス」がある。この教会を有名にしたのは、側壁にある「赦しの門 Puerta de Perdón」であるが、そこには、巡礼者たちを迎え入れるように両手を広げているキリスト像が彫られている。「赦し」とは罪の許しのことであるが、ここでは巡礼者が病気やその他正当な理由で旅を続けることができなくなった場合、この入口を潜ることによってサンティアゴ・デ・コンポステーラまでの巡礼行が免ぜられると言う「赦し」でもあるそうだ。スペイン人ローマ教皇カリスト3世 Calixto III の勅許状によって認められたが、罪の償いの刑罰としての「巡礼」の側面も示すものであろう。



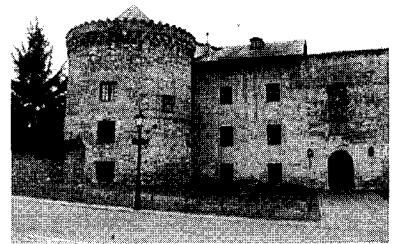
正面奥が
ビリャ・フランカ・デル・
ビエルソのサンティアゴ教会



サンティアゴ教会の
「赦しの門」

残念ながら扉は閉ざされ、鍵がかけられていた。我々は赦しは得られなかったようである。

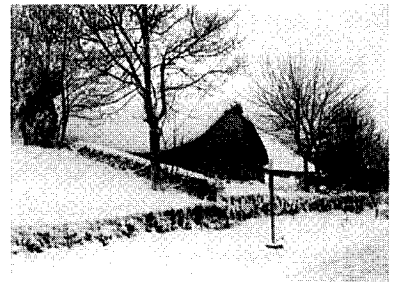
サンティアゴ教会の坂を下った突き当たりに、14世紀に築かれたという四隅に円筒形の塔をもつ堅牢な城塞 Castillo de Villafranca がある。ピリャフランカ侯爵オソリオ Osorio 家は18世紀にブルボン家から移入された現王家より歴史の古い一族で、かのアルバ公爵家などと並ぶ名門とのことである。その他サンフランシスコ教会 Iglesia de San Francisco やサン・ニコラス教会 San Nicolas El Real などが散在している静寂な町である。



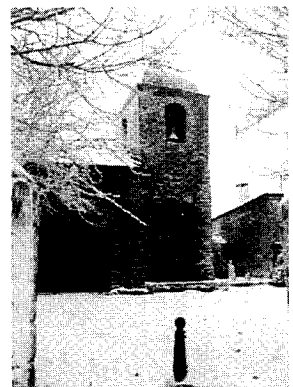
城塞カスティーリョ

(10) オ・セブレイロ O Cebreiro

サンティアゴ巡礼路最後の難所といわれる標高約1300mのセブレイロ峠は年中風雨と吹雪に晒されているとガイドブックに書いてあったが、その通りで、前回訪れた時は横殴りの雨、そして今回は吹雪ではないものの積雪の中、これ以上の前進は無理とのドライバーの申し出で途中で車を降り、あとはサンタ・マリア・デ・レアル教会 Santuario de la Santa María de Real まで歩いた。オ・セブレイロは紀元前からケルト人が居住していた村で、ローマの侵入後もその文化（ex. 石壁に茅葺き屋根をのせた住居、パリョサ）を維持した。9世紀に巡礼者のための教会と救護院が建てられた。プレ・ロマネスク様式の教会には、守護聖女サンタ・マリア・デ・レアル像がスポットライトを浴びて安置されている。隣の救護院は扉に鍵がかかり、閉ざされていた。向かいのお土産屋兼バアルには村人たちが昼食をとるためか集まっていた。当然のことながら巡礼者は1人もいなかった。



雪のオ・セブレイロ



雪のサンタ・マリア・デ・レアル教会

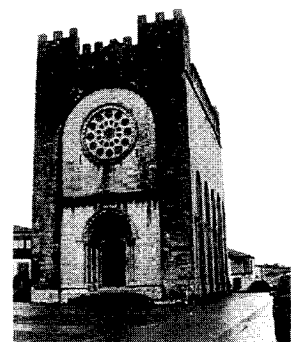
(11) ポルトマリン Portomarin

その起源をローマ時代に遡るポルトマリンは、ミーニョ川沿いにあり、中世には3つの教団（サンティアゴ騎士団、テンプル騎士団、ヨハネ騎士団）の本部が置かれていた重要拠点であったといわれている。1956年ミーニョ川を堰き止めて造られた貯水池（人造湖）のため、中世からの村と橋は湖底に沈んだ。現在の町は1962年に高台に移築・再建されたもので、川を渡った町の入口の急な石段の下にはサンティアゴまで89.5kmの道標がある。高台の広場には人影はほとんどなく、サン・ニコラス教会は城塞のようながっしりした造りで建っている。ここはミーニョ川でポルトガルにもつながっており、宗教と軍事が共存していた名残を感じることができる。



ポルトマリン入口の石段

サンティアゴ・デ・コンポステーラまであと40kmのアルスア Arzúa の街を経由して、いよいよ聖ヤコブが眠る都市へ車を走らせる。



ポルトマリンのサン・ニコラス教会

(12) モンテ・ド・ゴッソ Monte do Gozo と

サンティアゴ・デ・コンポステーラ Santiago de Compostela

サンティアゴ空港のあるラヴァコリャLavacollaは「秘所洗い」の意味で、サンティアゴ・デ・コンポステーラに入る前、ここを流れる小川で巡礼者たちは身を清めたことに由来するという。そして今は、時々現代の文明を象徴する飛行機の轟音が聞こえた。

日が沈みかけた頃に「歓喜の丘（モンテ・ド・ゴッソ）」に辿り着いた。千キロ以上の長い道のりをひたすら歩いて来た巡礼者は、最後にこの丘に駆け上がって、遥か彼方に遠望できるサンチャゴ大聖堂の3つの尖塔を見だし、巡礼の苦しみからもうすぐ解放され、すぐに聖ヤコブに会えることを喜んだという。2体の巡礼者のブロンズ像がその喜びを体全体で表現している。ここから巡礼路を約1km進めば、石畳のサン・ペドロ通りを通り、「巡礼路の門」Porta do Camiñoからサンティアゴ旧市街に入り、巡礼者を両手を広げて迎え入れてくれるヤコブ像が立つ大聖堂に到着する。以下、サンティアゴ・デ・コンポステーラについては、菅谷成子先生の報告に委ねたい。



モンテ・ド・ゴッソの
巡礼者ブロンズ像



モンテ・ド・ゴッソより
サンティアゴ・デ・コンポステーラの大聖堂を望む。

(13) フィニステレ Cabo Finisterre

サンティアゴ・デ・コンポステーラから西に約90km、車で2時間ほどのフィニステレは、「終わり fin」と「陸 tierra」の合成語で、大西洋に面したスペイン最西端の「地の果て」である。リゾート地として開発が進む街から3kmほど進むと3方が断崖絶壁の岬に辿り着き、その先端に灯台があり、そこで道は途絶える。

ここで巡礼者たちは身につけていた衣服や靴を海に流すか岩場で燃やす。それは巡礼の旅を締めくくる儀式でもある。それは汚れたものから疫病が発生するのを防ぐため、また巡礼を終え、還俗の儀式、新たに生まれ変わる「死と再生」を意味していたと説明される。現に断崖のあちこちに身につけていたものを燃やした跡や燃え残った靴があったり、杖が十字架にして突き刺してあったり、ある種の墓場のようなであった。高所恐怖症の内田先生が断崖の波打ち際近くまで降りていかれたのには驚いた。

以上でミニバスを借り上げての我々の駆け足の巡礼路の旅は終わった。前述の通り、巡礼の時期ではなかったため、多くの施設が閉鎖され、巡礼者の実態やサポート体制など当初の目論見を十分に果せなかった部分もあるが、国道沿いに巡礼専用の路が並行して別に作られていること、帆立貝がシンボルの道標が巡礼者のために整備されていたことなど、実体験でしか得られない情報も多々収穫でき、十分意義のある現地調査であった。とにかく実地に巡礼路を走破したことは貴重な経験で、巡礼路を歩く巡礼者の気持ちの幾分かは理解できたのではないかと思う。



フィニステレの灯台



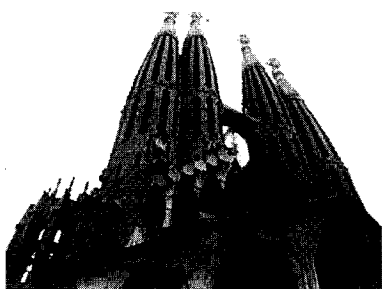
巡礼者が燃した靴の残骸



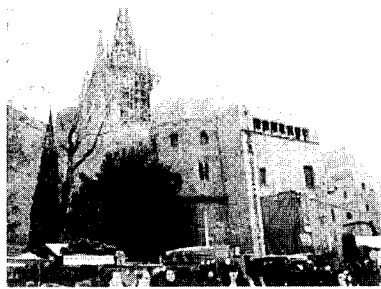
巡礼者が残した杖と帆立貝

(14) バルセロナ Barcelona

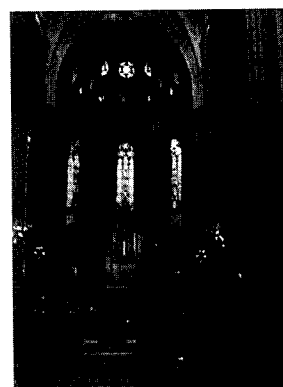
直接サンティアゴ巡礼路と関係するわけではないが、サンティアゴからの帰国の航空便の関係で、バルセロナでトランジットすることになり、1日をバルセロナ市内の宗教関係施設の調査に宛てた。①地下鉄を利用して、まずサグラダ・ファミリア聖堂 *Templo de la Sagrada Familia* を訪れた。サン・ホセ帰依者教会の本堂として1882年に着工され、かの有名なガウディの斬新な構想で現在も建設中の建物であるが、建設費のためとはいえ入館料の高さと観光客の多さに少々辟易とした。いつ完成するかは未定であるが、館内には最終案の石膏模型が展示されている。②地下鉄ジャウマ・プリメ駅で下車し、ゴシック地区にあるカテドラルへ。これはバルセロナが最も繁栄していた13世紀から150年の歳月を要して建てられたもので、カタルーニャ・ゴシック様式の建物はその後修復を繰り返し、現在も修復工事中であった。ステンドグラスから光が差し込む中央祭壇の地下には、この街の守護聖女サンタ・エウラリアが眠る棺が安置され、両側にはピラール聖母像や黒いマリア像などが祀られている礼拝堂が建ち並んでいる。エレベータで屋上に上がるとサグラダ・ファミリア聖堂やバルセロナの街並みが一望できる。③市歴史博物館 *Museo d'Historia de la Ciutat* は15世紀に建てられたカタルーニャ・ゴシック様式の貴族の館を改修したもので、順を追いながら町の発展をみる事ができるが、特に地下のローマ時代の市壁や街の住居（洗濯屋やワイン醸造所など）の遺構は当時の人々の生活を見事に復元しており、改めて古代ローマの権力の大きさを実感すると同時に保存状態も良く、建物の下に取り込まれた形での展示は大変興味深かった。



サグラダ・ファミリア聖堂



改修中のバルセロナ大聖堂



大聖堂内部・主祭壇

参考文献

Vicente Pastor ed., *The Road to SANTIGAGO*, Edilesa, 2002².

Basilio Calderón et.al., *Camino de Santiago PILGRIM'S GUIDE*, Junta de Castilla y León.

GEO Global 「スペイン・サンチャゴ巡礼の道」 I－IV、<http://www.geo-g.com/04essay/contents/europe/tada/index.htm>

Wikipedia、[http://ja.wikipedia.org/wiki/ サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路](http://ja.wikipedia.org/wiki/サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路).

鎌田一志、『スペイン悠久の大地 サンティアゴ巡礼の道を歩く』自費出版、2006年.

土田芳樹、『還暦カミーノ スペイン巡礼記』2007年7月～11月に日本経済新聞に掲載.

安田知子、『ぶらりあるき サンティアゴ巡礼の道』芙蓉書房出版、2006年.

Carlos de Haro, *All Burgos and Province*, Editorial Escudo de Oro, S.A., 2006.

Rosa M^a Sánchez, Rintaro Kawai 訳、『レオンとその郊外』、Editorial Escudo de Oro,S.A.,2002.

Antonio Vinayo González, "*SAN ISIDORO*"in Leon, Edilesa.

地球の歩き方編集局、『地球の歩き方 スペイン 2006～2007年度版』ダイヤモンド・ビックス社、2006年.